

日本古典文學大系 31

保元物語 平治物語

岩波書店刊行

昭和 36 年 7 月 5 日 第 1 刷 発行 ©

昭和 51 年 4 月 20 日 第 16 刷 発行

定価 2100 円

校 注 者	なが 永 しま 島	ずみ 積 だ 田	やす 安 い 勇	あき 明 お 雄
-------	--------------------	-------------------	-------------------	-------------------

発 行 者	東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5 岩 波 雄 二 郎
-------	--

印 刷 者	東 京 都 青 梅 市 根 ヶ 布 1-385 白 井 倉 之 助
-------	--------------------------------------

発 行 所	東 京 都 千 代 田 区 一 ツ 橋 2-5-5 株 式 会 社 岩 波 書 店
-------	---

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 說	二
凡 例	四
保元物語	四九
平治物語	一八五
補 注	二九五
付 録	二四一
古活字本保元物語	二四三
古活字本平治物語	四〇一
古活字本略注	四六九
清濁參考資料一覽	四七五
付 図	四八八

解説

一 保元・平治物語序説

I 為朝・義平像の創出

保元元年（二五）七月十一日、日本中世の開幕を知らせる保元の合戦がはじまる直前のこと、崇徳院方の軍議に加わった源為義は、院方の兵力が天皇方に対して著しく劣勢であることを述べて、「ムゲニ無勢ニ候。郎徒ハ皆義朝ニツキ候テ内裏ニ候。ワヅカニ小男二人候。ナニゴトヲカハシ候ベキ」と言った。

この「小男」とは為義の息男、頼賢と、ほかならぬ鎮西八郎為朝のことである。もちろん、当時の為義の発想を考慮すれば、この言葉を額面どおりには受けとれない面もあるだろう。けれども、これは保元合戦の状況を実見者の日記や聞き伝えにもとづいて精細に描出したと認められる愚管抄の記事である。また保元の乱の顛末を、いちいち記録した日記として最も詳細な兵範記も、同じ十日に、為義が頼賢や為朝らを引率して、はじめて上皇の前に姿を現わしたと述べているのに、合戦が始まってから院方の敗北に終るまで、為朝の行動については何事も記録していない。

同じく平治の乱についても、愚管抄は、天皇方に属する平重盛の勇姿については、「馬ヲ射サセテ堀河ノ材木ノ上ニ弓杖ツキテタチテ、乗替ニノリケル」などと、平治物語の待賢門合戦の場と同様な表現でこれを描出した上で、「ユ、シク見ヘケリ」と称讃するが、その相手となったはずの悪源太義平の行動については全くふれようとしない。

ところが愚管抄に「小男」としか記されていない為朝について保元物語は、「其たけ七尺にあまりたれば、不通の者には二三尺計指あらはれたり。……弓手のかいな、めてより四寸長かりければ、矢づかをひくこと十五そく、弓は八尺五寸、

……天をかけるつばさ、地をはしるけだもの、目をかけつる物を射とめめずといふことなし。將門・純友にもこえ、貞任・宗任にもすぐれたり。上代ためしなく、末代にもありがたかるべき兵なり」とし、また彼の弓から放たれた一本の鏑矢は、「御所中、陣の中、響わたたりて、義朝の甲の星七八射けづりて、遙に後なる宝莊嚴院門の扉の、あつさ五六寸計なるが、金物ぐみに籠中過てぞ立たりける。鏑はざつとわれてはらりと落つ。兵共はばつとさはぎてあきれたり。下野守目もくれ、心もみだれて、既馬より落ぬべかりけるを、鞍の前輪をつよくをさへ、弓杖にすぎり、鎧ふみしづめ、うち甲をさぐりまはす」といった表現をえて、為朝の無敵な力量を示す。わずかに十七騎の兵で、五百騎にあまる重盛の軍勢を完全に圧倒し、さんざんに追ひ廻した待賢門合戦の悪源太義平のあざやかな造型などとともに、これらはすべて、兵範記から愚管抄にいたる貴族たちの諸記録がとらえようとしなかったし、またとらえることもできなかったところである。

日本中世の夜明けをさががけた領主階級の先頭に立つ若者たちの、まだ挫折を知らない勇躍する姿を、巨人的な英雄像として結実させ、しかも貴族世界を完全に圧倒するものとして押しだしたのが保元・平治物語であり、別項に論証するように、その作者たちと享受者群は、これらの像を時のたつにつれて、いよいよ壮大な人物に練りあげていったのである。

ところで保元物語が、後白河院の即位に対する崇徳院、関白忠通に対する悪左府頼長という貴族階級間の対立から説きおこし、敗退した崇徳院や頼長一家の悲傷に深く立ち入りながら、この希代の内乱も結果としては、智将の尽力と士卒の犠牲において、「逆徒悉退散し、王臣身をあはす」、つまり王朝の安泰に終わったと結末するまでの叙述に、一貫して表現しているように、物語の視点は全体としては始終、貴族階級のがわにある。したがって貴族たちは、当然源平両家を中心とする多数の武人たちに向って、権力の座から号令するものとして設定される。しかし為朝の献策を無視した悪左府頼長は、その無比の智謀にもかかわらず身を亡ぼし、義朝の策に従った信西は勝利者となる。平治物語でも、義平の献策を拒否した信頼は敗れ、義朝に鞭打たれて一言も返すことができないところまでつきおとされる。

このように、愚管抄や兵範記また百鍊抄などと、およそ異質の展望を保元・平治物語にくりひろげさせたのは、もちろん物語作者の視点の飛躍にもとづくのだが、さらにいえば、この内乱の過程でまきおこった、さまざまな悲喜劇の挿話が

語り伝えられ、それらの説話に作者の構想が媒介せられることによって、個人の力量をこえた自由な想像力のはばたきを可能にしたところはないであろうか。別項に説くように、この問題は諸本の展開がほぼ証明するところであるが、これらの口語りの中には、後に示すような、遠方から被害者あるいは傍観者として合戦を眺めていた人たちだけでなく、もっと積極的に内乱に参加した人たちでなければ、とらえることのできない挿話が少なくない。またそれらは、愚管抄の作者、慈円が偶然見たという、五位藏人中納言雅頼の書き留めた、詳細な実戦記録の類だけからでは発見できないもので、慈円などが、「保元ヨリ以後ノコトハ、ミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキ事ニテノミアランズル」として見ようとしたもので、歴史の積極的な側面に属する。たとえば八郎為朝などの、保元物語における巨人像への昇華は、これら複数の語りてたちの、いわば衆による構想力が不可欠の条件であって、おそらく個人的な想像力だけでは、とうてい実現しえなかったものに相違ない。

つまり事件は、もともと貴族の主導によって展開するのであるが、このような条件が生かされるかぎり、物語の展開は必然的に兵範記・愚管抄等の純粹に貴族的な視野をのりこえて、現実の、より本質的な側面に迫っていく。物語においても、領主階級の主導権が事件の展開ごとに確立され、おのずと彼らこそ歴史の主人公であることを証明してしまう。その結果は物語の構想をも前進させるのであって、平治物語になると、物語は貴族間の内部矛盾たとえば信西・信頼の抗争にはじまりながら、実質的には義朝・清盛を中軸とする源平両家によって代表される領主階級の主導権争いに転化する。そこで物語の展開もその結末も、もはや王朝中心でなくなり、平家の制覇と源氏の一時的な雌伏にいたるプロセスを描くことに中心がうつってしまう。ここまで来れば、もはや平家物語との距離はひとまたぎにすぎない。

これはあるいは、保元物語と平治物語との作者が、同一人であるかどうかを考えるばあいにも関連することかもしれないが、少なくともこの二つの物語は、その構想の本質的内容において、二つの乱に内在する歴史的な飛躍にもとづく、段階の相違があることだけは、見失ってならない前提であると思われる。

II 貴族的年代記の変革

保元物語の冒頭に、まず鳥羽法皇を登場させて、「天照太神四十六世の御末、神武天皇より七十四代にあたり給へる御門^{みかど}也。堀川天皇第一の皇子、御母贈皇太后宮、閑院大納言実季卿の御女也。康和五年正月十六日に御誕生、同年八月十七日皇太子にたゞせ給^{たまふ}。嘉承二年七月九日堀川院かくれさせ給^{たまふ}。同十九日皇子五歳にして御位にそなはらせ給^{たまふ}……」とつづける仮名交りの記録体は、大鏡などがしばしば用いた帝紀の書きはじめの形式と、ほとんど同様に見える。ところが平治物語の発端を見ると、儒教的な政治評論の外被のもとに、「夫末代の流に及で、人奢^{おごつ}ては朝威を蔑如^{ないがしろに}し、民武^{たけく}しては野心を^{きん}扶^{たす}む。能用意あるべきか」としながらも、「尤^もちうしやう(拙賞)せらるべき者は勇敢^{ゆうかん}の輩なり」と武家の實力を、とにかく評價するところから出発している。これらによっても、保元物語と平治物語との段階の相違は明らかである。

しかし一方では二つの物語はいずれも、たえず年代記にそって展開するという基本的な方法においては共通しているのであって、これは、もともと愚管抄にいう雅頼の日記などの貴族たちの記録類に、まず材料をえているに相違ない歴史的な物語として当然の結果であった。保元物語冒頭の叙述は、このような形式から最初の出発をふみだした、この作品の文学史的な位置をおのずから示すものである。

ところが保元物語の形式には、後白河院御即位にはじまり崇徳院の敗北に結末し、王朝の權威恢復へのコースが設定されているのに対し、平治物語では、すでに天皇・院の姿が後退し、巻頭まず信頼・信西の対立から説きおこし、下巻末は頼朝遠流に、それも守康の夢合せの説話等によって、伏線として源氏の制覇が見とおせるような結末になっている。

古代貴族の年代記的方法から出発した保元物語は、内乱という歴史の齒車の廻転にそって展開することによって、その形式の實質を転化させる。つまりこの物語における一つ一つの説話や物語的な挿話は、「保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本国ノ乱逆ト云事ハヲコリテ、武者ノ世ニナリニケル也ケリ」と慈円がその著書で慨嘆しつつも、歴史の飛躍を認めざるをえなかった変革の具体的な部分・一齣として位置づけられる。したがって貴族間の私的・家族的な勢力争いから、二つの階級の対立・抗争という、いわば公的で、より社会的な場所へ物語の世界は拡がっていく。保元から平

治へと物語が展開するにつれて、兵範記・百鍊抄のような記録形式はいうまでもなく、大鏡に見られる貴族の年代記の形式にいたるまでが克服せられ、ここに、より広汎かつ深刻に世界の変革をとらえうる新しい年代記としての、歴史的な物語の形式が誕生するのである。

Ⅲ 叙事詩的作品の形成

しかし平家物語の素材とした治承・寿永の内乱とちがって、保元・平治の乱は事件としても単純で、戦闘は一日の間に勝敗を決する程度の規模にすぎなかったから、物語は保元も平治も同様に、上巻の原因、中巻の決戦、下巻の結末という単純な構成をとっている。平家物語の幅の広さにくらべると、この物語が保元・平治という二段がまえでありながら、構想においても著しく単純であることは否定できない。けれどもそれは同時に、初めてその実力を公然とためし、自らも意外なほどの自信を獲得した階級だけの知りうる、ういういしい精神の躍動を明快に誇示するという、健康な単純さとも照応している。為朝をはじめとする源家の武士たちの、みじんも敗北感のない群像は、その典型的な姿であり、物語は、もともと王朝の健在を証明しようとしたにもかかわらず、作品の具体は、むしろ貴族階級の敗北と領主階級の樂天的な展望とを表現する絵巻としてくりひろげられる。

ところで保元・平治物語には、たとえば崇徳院が讃州に遷幸の道すがらを、「暁ふかき空なれば、所々の鳥の声、寺々の鐘の音、御身にしみてぞ聞召す。有明の月の影に、嵐の山、小倉の嶺、都の空は曇らねど、御衣の袂の上にこそ、晴ぬ時雨はそゝきける」と表現し、近衛院や鳥羽院の崩御を述べては、和歌や和漢朗詠集の詞章を導入したり（「補注保元六」、女院の悲しみに集中したりし、また頼長や信西一族の没落の情景を描いたばあいにしても、事件を情調的かつ詠嘆的に、しかしかなり内面的にとらえることに成功している。合戦描写のばあいでも、たとえば、「重盛、生年二十三、赤地の錦のひたゝれに、櫓の匂の鎧に、蝶の丸のすそ金物しげくうたせたり。竜頭の甲の緒をしめて、小鳥といふ太刀をはき、切生の矢をい、重簾の弓もつて、黄鶯毛なる馬に、柳桜をすりたる貝鞍をかせてのり給へり」といった鎧や物具の色彩をふく

む細目の描出があり、また、「比は平治元年十二月廿七日の辰の尅、昨日ゆきふりて消やらず、庭上に朝日さし、紫震殿にうつろひて、物のぐのかなものども耀合て、ことに優にぞみえたりける」などに見られる自然の把握のしかたにいたるまで、王朝物語文学にはぐくまれた感覚的に鮮明な描出の伝統は色濃くにじみ出ているのであって、それらはあわせて、作品を従来の単純な合戦記から区別させるものとなっている。

たとえば古代末期の将門記や陸奥話記のような軍記ものの先駆的作品の系列は、今昔物語集巻二十五の合戦譚などをも含めて、まだ貴族社会の内的矛盾には、少なくとも直接にあるいは全面的に触れることをなしえなかっただけでなく、また、これらの合戦に伴って流布した新鮮な口語りを、事件の年代記的な叙事性と内面的に統一するところまで成熟してはいなかった。つまり将門記以下の先駆的な軍記ものは、さまざまな文学としての新しさを示したにもかかわらず、なおいわゆる合戦記以外ではないという一面的な狭さをまぬかれることができなかった。

保元・平治物語は、その全構想の前提として、すでに述べたような貴族世界の内的矛盾の全面的な追求に発想しているために、一方ではいわば王朝物語的な内面的傾向を持続しながら、同時に口語りに媒介せられた新しい幅広い世界に当面している。しかも、それらを保元・平治の内乱という時間の系列によってつらぬくことによって、ばらばらの説話や物語的挿話の集成でない、いわば叙事詩的な作品へと集中化することに成功した、さいしょの軍記ものを実現したのである。

しかし保元・平治物語における、これらの内面的諸傾向・諸要素の統一は、もちろん一挙に獲得せられたものではなかった。それは別項に説くように、作品の最初の形成から、現存する諸異本の系列に見られるような漸次的あるいは飛躍的な展開を通じて実現せられた成果にもとづいている。しかもその結果、貴族世界の内的矛盾を全面的にとらえただけでなく、さらにそれを新しい世界との対立・葛藤においてとらえることにも成功したのである。

したがって保元・平治物語は、為朝・義平のような典型的に行動的な英雄像を聳え立つように造型しただけでなく、貴族世界の中からも、権力の座をかすめ取った信頼に対して、「あれは右衛門督、我は左衛門督。人は何とも振舞、座席の下には着くまじきものを」と、「信頼の上にむずと着き給ふ」と表現される光頼卿の強力な人間像が、兵たちにも、「ゆゑし

き剛の人かな」と讃仰せられる形で造型せられる。また女性たちでも、敗戦の結果入水して自殺する為義の妻や、徒手でもって清盛の権力から我が子・我が一族を守りぬこうとする常葉のような積極的な女人像を生み出すのである。王朝物語に登場する静的・情調的な人物と対蹠的な、これらの行動的で意志的な人間群像の造型は、保元・平治物語を古代王朝文学から峻別させる著しい指標となっている。

以上のように、保元・平治物語の作品としての内部構造は、鮮明な対立によって成り立っているので、一方では崇徳院・頼長や信西一家、あるいは為義やその一党のように動乱に傷つく人びとの群れが、他方では動乱を担いながら、これをつきぬけて行動する保元の為朝・義朝、平治の義平・清盛のような人物の群れがあり、そのおのおのの群れが、またその内部でもって対立するという構成となってくる。したがって作品は、しばしば劇的な対立場面を実現することが少なくない。

周知のような義朝と為朝の、また重盛と義平との対立場面は、その最も緊張した関係を示すところであるが、貴族階級の間でも、たとえば光頼卿参内の一章のように、この緊張関係を体现する人物が造型され、それは光頼の意志的な性格を躍動させているばかりでなく、有名な惟方との問答、「さて主上は何に渡らせ給ふぞ」「黒戸御所に」、「上皇はいづくにおはしますぞ」「一品御書所に」、「神璽宝剣は何に」、「夜のおとゞに」、「内侍所は」、「温明殿に」、「中宮は何に」、「清涼殿に」、「さて櫛形の穴に人のかげのして、朝がれいに人の声のし候は誰ぞ」といった対話形式による簡潔で劇的な表現を創出する。この表現も、すべて対立する両者の衝突によって事件を展開させる、作品の内部構造から必然的に生れたものに相違ない。一般に人物や事件の対立は、たとえば鳥羽院・後白河天皇に対する崇徳院、関白忠通に対する悪左府頼長、信西に対する信頼、源家の武士に対する平家方等々と、いたるところに構成せられているが、これらもまた別項に説くように、諸異本の展開にともなっていて、いっそう鮮明な形式を獲得していることが証明せられるであろう。大系本の底本に採用した金刀比羅宮蔵本のような集中的表現の成熟は、おそらく広汎な享受者層の期待に応じながら、作品をつくりかえた人びとつまり以下解説する諸本の展開に見られるような、漸次的あるいは飛躍的な再構成の主体となった複数の作者たちの力に

よることはいうまでもない。しかしまた同時に、このような作者たちと享受者層とを媒介した盲目の琵琶法師たちの、積極的な役割を無視することはできないであろう。

IV 「語りもの」としての展開

以上は主として、大系本の底本に採用した金刀比羅宮藏本(以下金刀本と略称)の系統に属する諸本によって、保元・平治物語にとっての基本的な問題を概括したにすぎない。もし、さらに具体的・全面的にこの作品をとらえようとすれば、この底本そのものの本文批判が必要になってくる。

右の金刀本について、ここで結論的にいってしまえば、それは保元と平治との二つの物語を、できるだけ同じ構造に仮構しようとしたものと考えられる。たとえば為朝と悪源太とが、何れも合戦直前の除目を嘲笑したり、白河殿合戦のさい、為朝の二十八騎が鎌田の勢を追撃したのに対し、待賢門の合戦で義平が重盛を追いつ返し、また敗戦の結果、二人とも「鳥の飛ぶがごとくに」逃亡したりしたことなど、何れもこの二人を一对の巨人として相似形の人物に造型している。ところが、この事実から一方では保元と平治との二つの物語は同一作者の手になるとする説と、同じ理由から別作者によるものとする説とが別れてきた。しかし少なくとも、右の義平に関する挿話についていえば、本書の平治物語本文の各所に注記したように、原形に近い伝本によっては全く無いか別の表現となっており、けっして為朝と相似形の構想になってはいない。諸本研究の結果からすれば、むしろこれらは、金刀本や流布本等に特有の相似形表現であることが明らかである。したがって、右のような部分を根拠にして作者を推定したり、作品の構造を論じたりすることは、一定の伝本に限定した上で、はじめて許容されるにすぎない。何故かというに、保元・平治物語も平家物語がそうであったように、琵琶法師によって語られ、その語りをおして、その形式や内容を転化させながら流伝したものと考えられるからである。

永仁五年(三三三)の序文を持つ普通唱導集に、「琵琶法師、伏惟　こゝこゝ勾当。平治・保元・平家之物語、何皆暗而無滞、音声気色容儀之骸骨、共是麗而有興」とし、花園院宸記の元応三年(三三三)四月十六日の条に、「今夜俄御三幸中園

准后第一歩行也。召^ソ盲目唯心^ヲ今^ム彈^ビ比巴^ヲ。以^テ比巴^ヲ如^シ箏^ノ彈^シ之^ヲ、誠^ニ不可説殊勝^ノ者也。平治・平家等時之語也。女房多^ク聽^ク之^ヲ、徹明還御^スとするのは、併せて当時盲目の琵琶法師が保元・平治物語を暗んじて、平家物語と同時に、あるいは同様に語り、一般に耳からこれを享受されていたことを示す文献である。しかもその年代は、保元物語の最古写本の書写年代、文保二年（三〇）を挟んだ前後にわたる鎌倉時代であり、平治物語の最古の伝本としての平治絵詞の成立時期とも、ほぼ並行することが注目される。

こうした語りに媒介せられて、保元・平治物語は、次章に述べるような著しい異本群を生みだすのであるが、これらもまた平家物語がそうであつたように、単純な書写中の誤脱や作意による改訂だけにとどまらず、異本群ごとに新しい別の作者や、ばあいによっては別の享受者層さえ想定せざるをえないほどの質的な飛躍を示している。つまり、それぞれの異本群は、独自の作者（時には享受者群さえも）を擁しているものであつて、もし保元・平治物語を少しでも厳密に分析し正確にとらえようとするならば、これら異本群の展開を、その全体の流れにおいてとらえるための作業を欠くことができない。むしろ、このような操作そのものこそ、保元・平治物語を具体的かつ厳密にとらえる作業の実質にほかならない。しかも保元・平治物語の研究は、平家物語の研究にくらべて、なお、いちじるしく立ちおくれている。したがって、この解説の性質上、純粹に書誌的・文献的な記述はできるだけ避けるようにはしたが、作品論のために、これまでの本文批判の結論を更新せざるをえなかったこともあつて、解題的・考証的な叙述にも、かなりの頁数をさかざるをえなかった。しかし、異本群の展開において、右に述べたような作品論的な課題が、より具体化されるとすれば、以下述べる諸本論は單純な書誌的・文献的な問題の域を越えて、文学論的な、また文学史的な領域にまで、当然進み出ることを見とおしながら展開するつもりである。

二 諸本解題

近世初期に古活字本が版行され、つづいて同系統の整版本が流布して以来、最近にいたるまで保元・平治物語は、ほと

んどこれらの諸本によって読まれた。近世から近代へかけての流布という意味で、この系統の諸本を他の異本類から大別して、流布本と呼んできたのは当然であらう。もちろん早くも元禄時代には、京師本以下の諸本を校異した参考保元平治物語が版行されたが、それもお流布版の本文を前提とした上での校訂本であった。やがて昭和期に入って高木武氏等の研究以来、異本群は積極的に評価され、高橋貞一氏の別掲諸論文にいたって、金刀比羅本を「古本」とする本文体系が、いちおう完成した。しかしこの体系は、近來統々と発表されはじめた保元物語に関する本文研究によって、新しい段階での再検討を求められるようになった。

以下の諸本論は、保元物語だけでなく、あらたに平治物語をも加えて、現存する諸伝本をほぼ全面的に比較検討した結果の中間報告である。ただ本大系本の性質をも考慮し、諸本の解題にあたっては、単なる書誌的・文献的記述はできるだけ抄略し、次章の本文批判に必要なものだけに限って略説することにした。

I 保元物語の諸本解題

第一類 文保・半井本系統の諸本

1 彰考館文庫藏文保本 中卷一冊(上・下巻欠)

2 彰考館文庫藏半井本 三卷一冊

3 内閣文庫藏半井本 三卷三冊

文保本は元表紙に、「保元物語中三帖内 文保式年八月日 長寿□(高橋氏によれば□は「丸」。ただし現在不明)」と記し、また奥書にも、「文保二年八月三日書寫了 法花院」とある古体の片仮名交りの一冊本。鎌倉末期、一三二八年(花園天皇時代)の書写であるから、保元物語としては、現存諸本中の最古写本である。

半井2本は下巻末に、「右保元物語元禄辛未書以森尚謙所伝借半井驢菴本謄寫焉」とあり、参考保元物語に、「半井通仙院和氣瑞榮世々所藏也、故称之」として引用しているもので、同3本と同形式の片仮名交り本、元禄四年(一六九〇)の書写であるが、参考本によれば、かなり古い伝承の写本らしい。また半井3本は、2本と字配りも異なり、本文にも互いに字句の小異はあるが、全くの同系統本で、別に保

元平治物語附録が一冊あり、参考本にもちいた流布版本との異同を略校し、「于時寛延四辛未年仲春半井本再校シテ改之」と記している。以上の三本は、卷々の区分も共通し、いずれも中巻は、「保元々年七月十一日寅刻ニ新院ノ御所ニハ敵寄タリト聞ケレバ」にはじまり、中巻末は、「聖意ニ叶ハザレバ我伴ハザル由大明神御託宣有ケルトゾ承ル」に終っている。そのほか文保本と半井本とは校合の結果によっても、全く同系統本と認められる。前者によって後者の字句の小異や欠脱等を補いうるが、文保本にも欠脱はあり、両者互いに補足する程度の小異同があるにすぎない。したがって半井本は、鎌倉末期の保元物語を再現するための第一文献である。

第二類 鎌倉本

4 彰考館文庫蔵鎌倉康豊本

上・下二卷一冊(中巻は別本)

上・下巻末に「上野守康豊」の識語があり、また「右以鎌倉相承院本写之畢」と記しているが、中巻末には、「此一巻以鎌倉等覺院本書写之畢」と記し、鎌倉康豊本の欠巻であった中巻を、別系統に属する第四類(金刀本系統)本により補ったものらしい。鎌倉本は参考保元物語に、「問注所上野介三善康豊手書、而鎌倉相承院所蔵也、故称鎌倉本、此本第二卷闕」とするもので、当時から欠本である。

本書は平仮名交り本で、文体は第四類本に近いが、上巻の冒頭は、「近比帝王御き……」に始まり、第四類本では中巻冒頭にある為義猷策の事の条が上巻末におかれ、また下巻は新院御歎きの事の条から始まる。また下巻末は第四類本とはほぼ同様な部分に、いちおうの結びがあった上で、さらに為朝大島渡し以下の説話をつづけているなど、他の類と全く異なる独自の組織から成り、したがって本文にも大異がある。ただ文中「……」点を付して本文を中略したり、部分的に文章の前後し錯簡を思わせるところもあって、本文上多少の問題はあるが、他に類のない独自性を持つ孤本である。

第三類 京国本系統の諸本

第三類諸本は、本文や構成だけでなく文体にいたるまで他類と著しく異なる。巻頭は、「近来(または「近比」)帝王まし／＼き」に始まり、下巻末は為朝大島渡し以下の説話の後に、「保元の合戦はふしぎ成し事ぞかし。おちをきる平氏もあり、父をころす源氏もあり、或は子にをくれて身をなぐる女もあり、或は主に別て命を捨る郎等もあり、一かたならぬ哀は、このときなりとぞ申ける」と結末する左記の伝写群である。

5 京都大学附属図書館蔵本

三卷三冊

6 京都大学国史研究室蔵本

二卷二冊

7 東京教育大学附属図書館蔵本

三卷二冊

8 学習院図書館蔵慶長十六年奥書本

三卷一冊

9 学習院図書館蔵(班山文庫旧蔵)慶長十二年奥書本 一卷二冊

10 蓬左文庫蔵(一)本 二卷二冊

右の神宮文庫本には、「文政十一年九月一日令人写尾張家之秘本而自校畢

広(花押)」とする奥書があり、蓬左文庫本を忠実に書写した

もの。右諸本中、蓬左文庫本・神宮文庫本の両本だけは、巻頭「申比……」に始まるが、その異同は、実は両本ともに、第四類(金刀本系統)本の組織で上巻末に近い、主上が卯の刻に東三条殿へ行幸の項以後が第三類本であって、それより前の部分は第四類本系統の本文であることからおこったものである。したがって10・11本を全体としていえば、三・四類の本文を併せた混合本である。

第四類 金刀本系統の諸本

現存写本中、古くは最も流布した類とおもわれ、大系本に底本とした金刀比羅宮蔵本(略号、金刀本)は、まゝ誤脱もあるが丁寧な書写によって詳細な振仮名までを留めた、この類の代表的な伝本の一つである。第四類の諸本は、巻末に大島渡しからその最後に至るまでの為朝説話を欠くなど、次章に示すような独自の組織を持つ本文である。

12 金刀比羅宮蔵本 三卷三冊

13 天理図書館蔵(一)本 三卷三冊

14 天理図書館蔵(二)本 三卷三冊

15 内閣文庫蔵(一)本 中・下巻二冊(上巻欠)

16 静嘉堂文庫蔵(松井博士旧蔵)(一)本 三卷三冊

17 静嘉堂文庫蔵(玄圃斎旧蔵)(一)本 三卷三冊

右の諸本中、たとえば12・17は、微細な異同にわたれば、13 16 17・12 14 15等がそれぞれグループをなしているが、ほとんど大異のない同種本と認めてよく、以上の諸本にくらべれば、やや小異の目立つ19本をも含めて、特に20以下の諸本と大別し別種とすべき異同がある。また20の陽明本は、微細な点まで21(内題に「ほうけんき」とある)と近い部分が多く、22は、「宝徳三_未卯月 成行書之」の奥書があり、文保本を除けば最古の書写年代を明記した伝本である。右の宝徳本は、いちおう四類本とするが、二巻本としての区分の場所も、上巻頭の、「近比帝皇御座き」に始まる点や、本文中に、まゝ空白を残す箇所(第一丁表・裏ともに)まで、第五類の京師本と至く等しい。次に23は、題箋・内題ともに「保元記」とし、これも「近比帝王おはしましき」に始まり、宝徳本に近い部分もあるが、巻の区分は第四

11 神宮文庫蔵(一)本 二卷二冊

18 学習院大学国文研究室蔵本 中・下巻二冊(上巻欠)

19 学習院図書館蔵(九条家旧蔵)本 三卷三冊

20 陽明文庫蔵(一)本 三卷三冊

21 京都大学国文研究室蔵(保元記)本 三卷三冊

22 陽明文庫蔵宝徳三年奥書本 二卷二冊

23 東京大学国語研究室蔵(保元記)本 三卷三冊

類本と異なり、本文の小異同も少なくないが、これらはいちおう四類に収めうる程度の本文として、この項に収めた。なお微細な異同の検討は今後に期したい。

第五類 京師本系統の諸本

24 静嘉堂文庫蔵旧本保元物語 二卷一冊

25 彰考館文庫蔵京師本 二卷二冊

参考保元物語に、「凡称「京師本」、得之于京師、因称之」とする本で、24本は元禄年間に書写した旨の奥書があり、二卷本の合綴、松井博士旧蔵本である。第五類本には、下巻末に長文の為朝説話を附載するが、これは第三類本の巻末の為朝説話と全く同系統の本文である。たとえば24本の組織を見ると、四類本巻末の結語のあとに一字空白を残し、つづいて「扱も今年も暮ぬれば、ちやうくわんも二年になりにけり」以下、為朝生捕りから遠流までさかのぼって、第三類の為朝説話を大略そのまま附載しているために、為朝が湯屋に入って捕えられる挿話が二回重出する。これによっても、第四類の宝徳三年本と同種の本文に、第三類本の上記の巻末部分を加えたものと認められる。なお25本は、下巻末の為朝を詠んだ落首以下を欠損していて、24は、これを別筆で補ったものかと思われる。補筆部分には多少の抄略があろう。しかし、それ以前の本文は両本同系統本で、24本も同じく京師本系と認められる。

第六類 正木本系統の諸本

26 正木信一氏蔵本 三卷三冊

27 宮内庁書陵部蔵(一)本 三卷三冊

正木本の上巻頭「中ころていわうまし〜き」以下の本文は、第四類の20陽明文庫蔵(一)本や21京大国文研究室蔵本と全くの同類同種に属すると認められるが、正木本は、これら同種本の巻末結語の直後にあたる部分に空白を残し、(正木本には他に文中空白を残す所は皆無である)特に改行して、さて第三類本と同系統の為朝説話を附載しているので、為朝大島渡し以後の部分を追補した過程が明瞭に跡づけられる。これによって、京師本における為朝説話の追補の過程も類推できよう。なお26本と27本とは微細な点にいたるまで、完全な同種本である。

第七類 杉原本

28 彰考館文庫蔵杉原本 三卷三冊

参考保元物語に、「九条殿家司杉原出雲守平盛安家蔵也、因称之」とする本で、巻頭に流布本系の序章があり、第一〜六類本までにはなかった目次がある。しかし序章が終ると、「中比帝王まし〜き」に始まる第四類本の冒頭に近い本文となる。ただし全般的には流布本